



<潮江東小学校研究テーマ> **学びに熱中する子供の育成** ↔ **子供たちが「自分の学びを振り返り磨き続ける」** 単元・本時を描く

単元構想

- ☆国語科における「能力」はどこにあるのか？
- ★「能力」は、単元の最後にだけあるものではなく、学びのプロセス（過程）＝言語活動の中に埋め込まれているものである
- ※本単元でいうと、毎時間の「推敲」そのものが能力と言える
- ↓
- ★言語活動を充実させること＝能力ベースの単元を創ることが大切

本時

- ☆「振り返り」はいつ行われるのか？
- ★導入時：自分の作文の「成長」と「きっかけ」のつながりを見直す
- ★課題が焦点化された時：友達のモデル文から気付いた「きっかけ」の書き方の工夫を基に、自分の作文を見直す（推敲をする）
- ★推敲後：推敲した自分の作文の「きっかけ」がよくなったか見直す

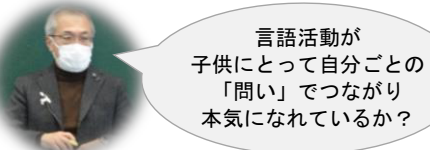
島根県立大学教授・高知県教育委員会事務局学力向上総括専門官 齊藤一弥先生の指導・助言

【本時の授業デザインについて】

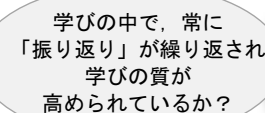
◎子供の「成長実感」と「振り返り」
 子供の「振り返り」は、授業や単元の終盤だけで行われるものではない。今の自分の学びの状況を、「これでいいの？」と問い直し、よい学びを決定し続けることで、自らの成長を実感していく

↓

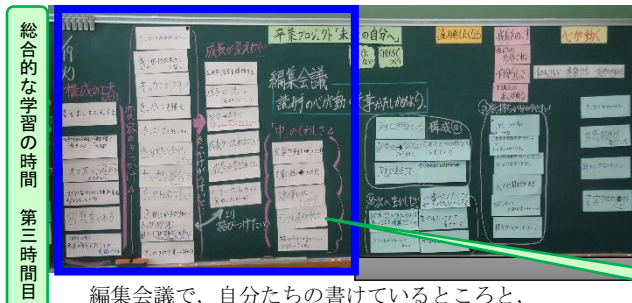
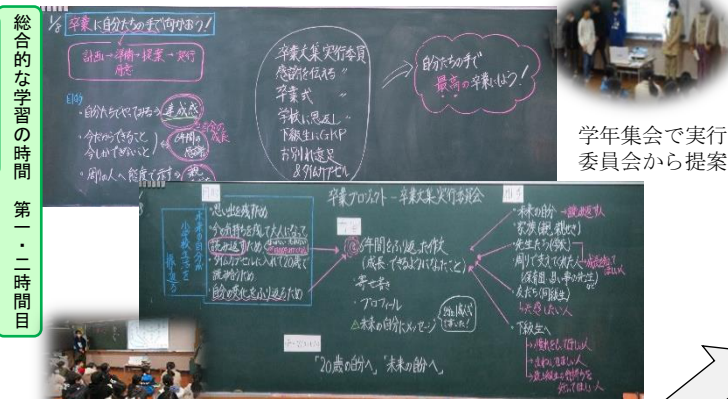
それに対して授業者は、「本当にそれでいいの？」など、子供が「自分はどうだろう？」と問い続けることができるような投げかけを心掛けたい



第6学年 単元名：ひがしっ子卒業プロジェクト1「未来の自分へ」
 教材名：「卒業文集」を作ろう（東京書籍6年）
 提案：高知市立潮江東小学校 6年1組 清田尚吾教諭

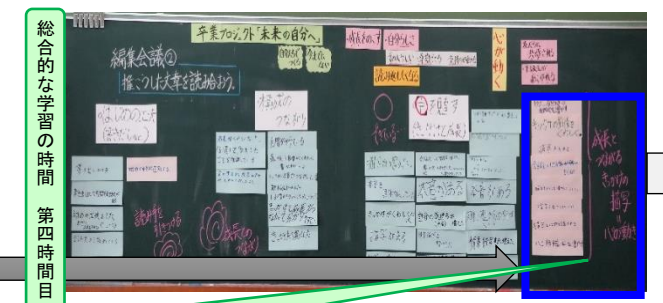


単元構想



【言語活動を推進する時の3つのポイント】

- 相手意識：卒業文集を読んでくれる全ての読み手
- 目的意識：卒業後のいつかの未来に、読み返したくなるように自分の「成長」を書いて残しておくこと
- 意図：卒業文集には、身近な人や未来の自分が読んだ時に小学校での「成長」がよく分かり、何度も読み返したくなるような文章を書きたい



最後に、ここを修正したら推敲完了！

総合的な学習の時間の「探究の過程（繰り返される編集会議）」において、見直したいと考えていたことが解決され、作文が磨かれていっていることを共有できるように、整理の仕方を視覚的に工夫する

カリキュラム・マネジメントの視点に基づいた教科等横断的な単元構想

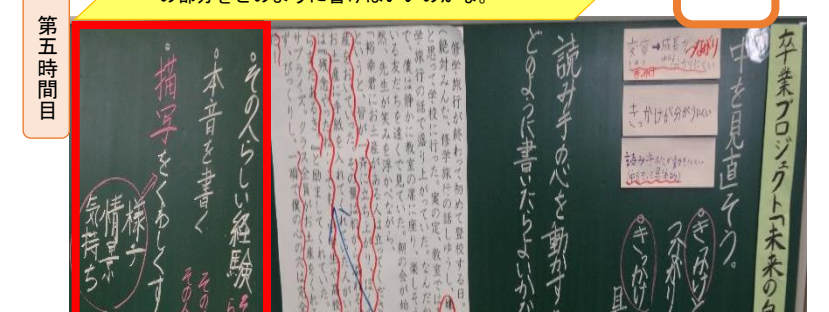
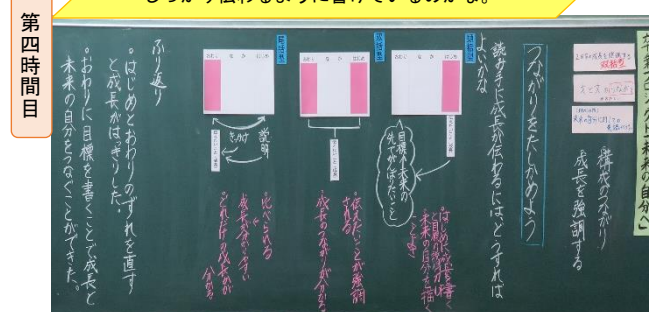
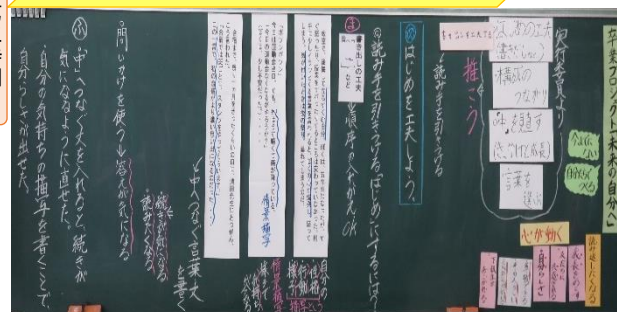
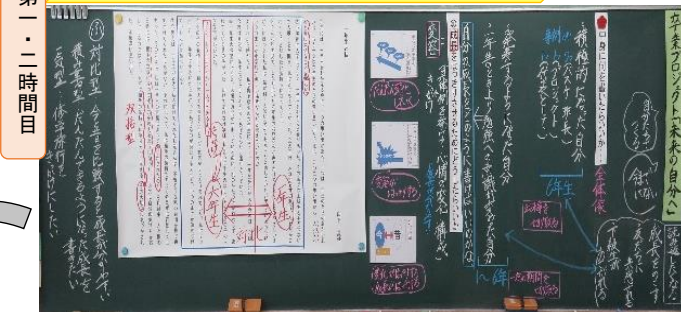
◎6年間貯めてきた書く力をフルに使って、未来にもう一度読み返したくなる卒業文集を書きたい。
 ■卒業文集の「未来の自分へ」で、これまでの成長とこれからの目標をどのように書けばいいのかな。

◎下書きは書けたけれど、未来にもう一度読み返したくなる程心を動かす文章になったかな。
 ■もっと読み手の心を動かして印象に残る文章にするには、どこをどのように推敲すればいいかな。

◎「初め」の話題の提示の仕方を工夫したら、読み手を引き付けられる書き出しになったな。
 ■読み手にいちばん伝えたい「自分の成長」が、しっかり伝わるように書けているのかな。

◎「初め」と「終わり」のつながりを考えて、「自分の成長」を伝えられるようになったよ。
 ■もっと読み手の心を動かすためには、成長の「きっかけ」の部分をどのように書けばいいのかな。

本時



モデル文からゴールイメージをつかむ

作文の「初め」の部分の表現の工夫とその効果（よさ）を考えて推敲する

自分が伝えたいことが明確に書かれているか、「初め」と「終わり」のつながり方を吟味して推敲する

推敲 1

推敲 2

推敲 3

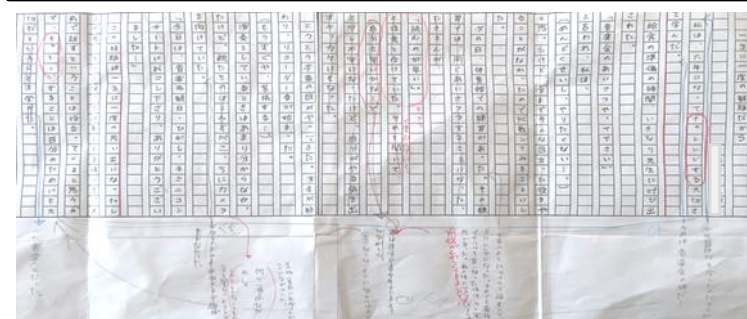
文章の働きやよさに着目して、言葉による見方・考え方が働いている

単元の重点指導事項である「推敲」に繰り返し取り組み、自分なりに納得できる文章になるまで、磨き上げている

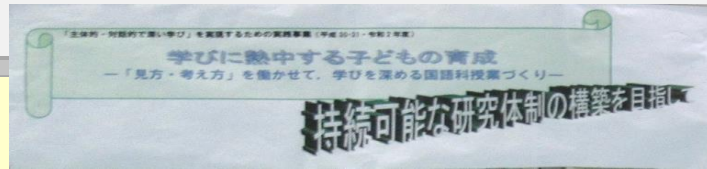
【本時の流れ】

- 1 本時の課題の共有「中を見直そう」
- 2 本時の問いの焦点化「読み手の心を動かすきっかけをどのように書いたらよいのかな？」
- 3 グッドモデルから、読み手の心を打つ文章の書き方をつかむ
- 4 つかんだことを使って、自分の文章を推敲する

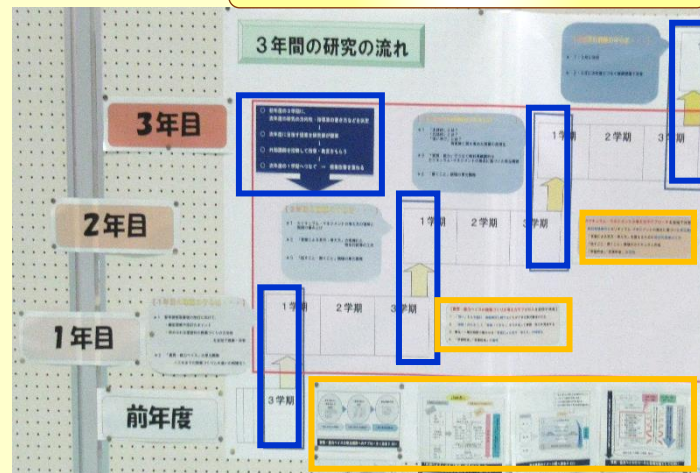
- 構成メモを作成
- ・青：出来事
 - ・ピンク：見たこと・聞いたことなど
 - ・黄：思ったこと・感じたこと



潮江東小学校の3年間の研究のまとめー持続可能な研究体制の構築を目指してー



3年間の研究の流れ

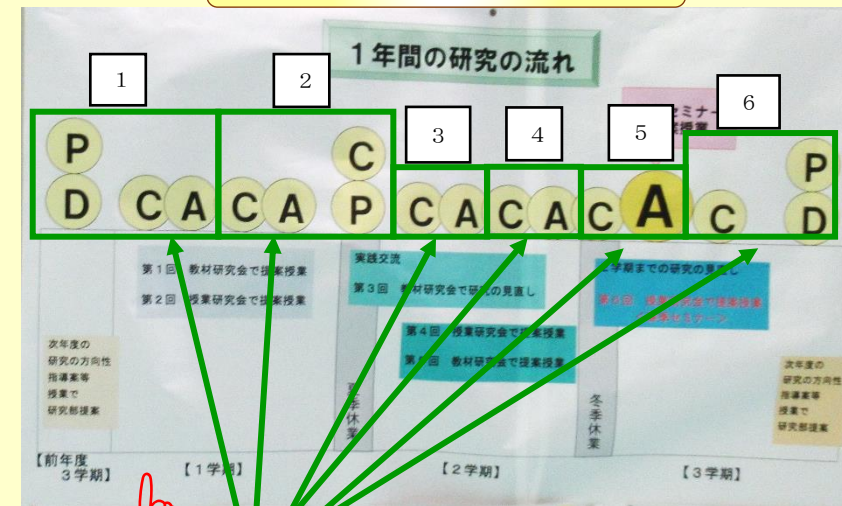


【年間指導計画】

本年度実施し見直してブラッシュアップした計画を、「実行されたカリキュラム」として描き直し、次年度に引き継ぐ。



1年間の研究の流れ



齊藤先生からのエール

【3年間の研究の価値付け】

- 1 単元はあるものではない、自分たちが「創る」という文化をつくってきたこと
- 2 カリキュラム・マネジメントの出発点である「能力ベース」の単元づくりに挑戦してきたこと
- 3 子供の「問い」で学びをつなぐ言語活動の質の向上と充実に取り組んできたこと
- 4 見方・考え方の成長の明示的指導に取り組んできたこと（学習貯金や板書の工夫）
- 5 学校全員が一つのチームとして、理念・価値観・使命感・授業づくりの行動統一に一丸に取り組んできたこと

【今後の実践の方向性】

- ★ これまでの実践履歴に満足しない探究姿勢をもち続けること
- ・実践履歴からの脱却
- ・新しいものへの挑戦



齊藤一弥 先生

【1年間の研究のスタートは3学期】

- 1 1年間の研究の総括をする（成果と課題の明確化）
- 2 次年度の計画を立てる
- 3 次年度の方針に基づいて
 - ・学習指導案の形を改善
 - ・研究部が全校研提案授業で示す
 - ・外部講師を招聘して指導・助言をもらう
- 4 改善点を調整して新年度のスタートに備える
- 5 4月に新メンバーで共有 → すぐに取組を始める



【研究成果の見える化と共有】

- 1年目：「能力ベースの授業づくり（赤本）」への実践例提供
 - 2年目：「話すこと・聞くこと」領域の年間指導計画作成
 - 3年目：「書くこと」領域の年間指導計画作成
- 毎年：実践集の蓄積（研究集録）
「学習貯金」・「言葉貯金」の蓄積と共有

【学習貯金・言葉貯金】

学校全体でファイルを揃え、学習貯金や言葉貯金を蓄積する。ファイルは、6年間持ち上がり、蓄積した貯金を活用するような単元を意図的に構想してきた。



【授業を通して検証したPDCAを何度も回す】

- 1 前年度の3学期からの計画に基づいて1回目の提案授業
- 2 1回目の提案授業を受け、改善した2回目の提案授業 → 1・2回目の振り返り・再計画
- 3 ここまでの取組を共有・修正したことを受け、3回目の提案授業の全校教材研究
- 4 全校教材研究での改善点を受け、3回目の提案授業
- 5 ここまでの提案授業を受けて改善した年度最後の提案授業（総決算）
- 6 一年間の授業実践を総括し、次年度の方針を立てる → 研究部からの提案授業（次年度につなぐ）



パネルディスカッション

「10年後の高知の未来を描く IN 潮江東小学校ーリフレクトし アップデートし続けるカリキュラム・マネジメントとはー」

齊藤先生のファシリテートにより、潮江東小学校の3年間の研究を総括するパネルディスカッションが行われました。パネラーは、潮江東小学校の高木研究主任と当日の授業提案者である清田教諭のお二人でした。

【パネルディスカッションより抜粋】

齊藤先生：毎年、**指導計画＝カリキュラムをつくる取組をしてきましたが、つくるうえで、大事にしたことや学んだこと**は何ですか？

高木教諭：指導計画＝カリキュラムは、学校全体の積み上げとして次の年の学年でも使えるような単元をつくっています。ただ、そのまま使うのではなく、その年の学年に合わせて、毎年改善しながらつくり直す必要があります。そして、活動のみにならないように、**付けたい力に迫ることができるように、子供達が「脳みそに汗をかいているかどうか**」ということを大切にしています。

清田教諭：まず、子供達が「**自分ごと**」として単元を進められるかどうかということを大事にしています。次に、**どういうところに目を付け、目を付けたところの何がよいのか、つまり、子供達の見方・考え方を働かせること**を意識しています。

齊藤先生：国語科としての目ですね。これまでの学びと似ているところ・繰り返してきたこと（既習）のうえに、どのような新たな学び（未習）を積み上げるのか、ですね。

齊藤先生：**能力ベースのカリキュラムで大切にしていること**は何ですか？

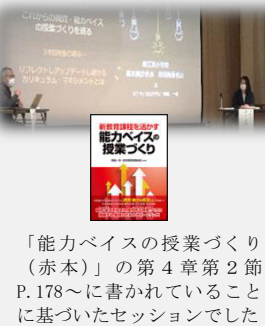
高木教諭：潮江東小学校では、単元に入る前に、授業者自身がゴールを作ります。学び手の子供の立場に立って教材やゴールを作ってみることで、**つまずきの予想や手立てを子供の視点で考える**ことができます。

齊藤先生：ゴールを学び手である子供の目線で問い直すことで、子供の視点で単元の展開を考えることができます。
清田教諭：単元のゴールに向かうために、**今何ができないのか**ということを子供達自身が自覚し、それを「解決したい」と思えるように単元をつくっています。

齊藤先生：教え込めば早いことを子供達に気付かせていくことは、もどかしくありませんか？

清田教諭：（昨年度の潮江東の取組を紹介）子供達が**自分で体験して気付いたこと・実の場でできたこと**が、子供達の**本物の力**になり、**使える力**として残っていくように思います。

齊藤先生：できなかったことができるようになったという子供達の成功体験は、同時に、教師にとっても成功体験となります。そして、それが、教師という仕事の醍醐味でもありますね。



高木美紗教諭（研究主任）から

3年間の研究指定を通して、一番学んだことは、子供達の学びが、いかに「自分ごと（真正で、オーセンティック）であるか」ということです。子供達の学びのエンジンを回すためには、子供達が「自分ごとの問い」をもつようにできるということが大切です。その「自分ごとの問い」がなくなり、解決したい思いが強ければ強い程、学びのエンジンが大きく回ります。そのために、教科等横断的な単元構想をしたり、学校や地域のあらゆる人材・もの・行事などを活用したりしてきました。子供達をより本気になる学びに誘うために、学校や地域・保護者がチームとしてカリキュラムをマネジメントすることの大切さも実感できるようになりました。授業者である私たちのこの学びを基に、まだこれまでにない新たな単元を開発していきたいと思っています。



高木美紗教諭（研究主任）

清田尚吾教諭（授業提案）から

3年間の研究指定の間、毎年提案授業をする機会を頂いてきました。校内でも機会があるたびに、諸先輩方の授業を見せて頂いて学んできましたが、やはり、自分で実際に授業をつくり「やってみる」ということが一番勉強になったと思います。パネルディスカッションで、「子供達が、自分で体験したことが本物の力になる」と言いましたが、これは、私自身も同じだったと思います。自分で単元をつくり、試行錯誤をし、上手いかわからなくて悩み、どうやったら子供達に分かるだろうかと工夫をし、何がいけなかったのだろうかと反省をしながら取り組んできました。そうやって、自分で「やってみる」ことが、自分のものになって残っていると感じています。これからも、「自分でつくる」「やってみる」を大切にアップデートしていきたいです。



清田尚吾教諭（授業提案）

参会者の感想から

○ 見方・考え方の成長には、時間がかかる。だからこそ、日々の授業の中で、「どこに着目するのか？」「何と何を関連付けて考えるのか？」、そして、「着目したり関連付けたりすることで、どのようなよいことがあるのか？」ということの子供達に投げかけ続けることが大事である。見方・考え方につながる思考育成を、教師自身が意識し続けたい。（小学校教諭）

○ 自分自身の「書くこと」の授業を振り返った時に、教科書教材のまねをさせて書かせるような「コピー・アンド・ペースト」の授業になりがちであったのではないかと、「はっ」とさせられた。「推敲」することの意味を見つめ直しよさを実感できるように、子供達に「書くこと」の力を付ける指導の在り方をもっと学んでいきたい。（小学校教諭）

○ 今日の子供達のように、小学校で6年間鍛えられ力を付けてもらった延長上に、中学校の3年間が積み上がっていくのだということを改めて考えさせられた。自分達、中学校の国語科教師は、子供達が小学校でどのような学びを経て中学校に来ているのか、もっと小学校の授業を見に行き勉強し、知ったうえで授業をつくっていかねばならないということ学んだ。また機会があったらこのような会に参加したい。（中学校国語科教諭）

○ パネルディスカッションにおける話が全て、台本にあるようなものではなく、これまでの実践に基づいた話だったので、一つ一つに説得力があった。これまでの研究発表会にはなかった形の会のもち方だったので、今後、他の講座などでも、このようによい実践を生々の声で詳しく聞くことができるように工夫された会があるとよいと感じた。（小学校教諭）

